



またかとお思いの読者も多いかと思うが、やはり話題は新型コロナウイルスとなってしまふ。

本誌（精神神経学雑誌）の編集委員会は、ほぼ毎月開かれている。これは新型コロナウイルス騒動（コロナ禍）の前も、コロナ禍真っ只中の今も同様である。大きな違いは、コロナ禍前の令和2年2月までの編集委員会の会議が、学会本部の会議室でのいわゆる「リアル会議」（+WEB参加の編集委員の先生方が数名）であったのに対し、3月の会議はほぼ「WEB会議」、4月以降は学会事務局の方以外はすべてWEB参加となったことである。この変更のスピードは速かった。毎月WEB会議の状態が1年近くも続けば、かなり慣れてきたのではないかと思えばそうではなく、編集子にとってはいまだにどうも慣れないことが多い。

他の委員会の会議でも同様であろうが、編集委員会は資料が多い。リアル会議だった頃は、委員会に出席すると、膨大な紙資料が会議室の机の上に置かれていた。WEB会議では、電子メールに添付されて送られてくるのであるが、資料によってワード、エクセル、PDFとバラバラである。「昭和世代」の編集子は、パソコンの画面で書類を見るのが不得意で、どうしても紙資料でないと見落としが多い。仕方がないので印刷するものの、一度に何十枚もの紙が消費されていく。自分でやるまで知らなかったが、この作業にけっこう時間がかかる（リアル会議だった頃、このようなたいへんな作業を黙々とこなしていただいた学会事務局のスタッフの皆様には感謝しかない）。

編集委員会でのみ使用していると思われるものに、オンライン査読システムがある。こちら、読んで字のごとく、WEB上でのアクセスになるのでパソコンを使う。

WEB会議は、V-CUBEという会議用のアプリを使う。通常はパソコンで使うものであるが、タブレットからも参加できる。

ここで昭和世代の編集子に問題が持ち上がる。リアル会議だった頃は、資料は会議室の机の上に積まれており、オンライン査読システムはやはり机にあるノートパソコンで読み、編集委員会の委員の先生方は一部のWEB参加者を除き同じ会議室にいる。ところがWEB会議では、これらの3つをすべて同じ画面で見るといふ離れ業を演じなければならぬ。

経済的に恵まれている委員の先生方は、複数のパソコンやモニターを駆使するという方法があるが、手元不如意の編集子には難しい。そもそも、モニターを買っても置く場所がない。その時、5年以上前に購入したが、もう使われずに部屋の片隅に置かれていたタブレットが目に入った。これを使わない手はない！ そう思ってさっそく使ってみた。古いAndroidの機種なので、PDFは読み込めるが、ワードとエクセルの使用は難しい。やはり、資料は紙に印刷しよう。オンライン査読システムは立ち上がらない。これは、自前のなけなしのノートパソコンで見よう。V-CUBEのアプリはインストールできた。パソコンと違い、タブレット仕様のアプリは画面が小さく、画面もすべての参加者の顔は見えず、現在の発言者しか映らない。しかし、編集委員長のお顔は見えるし、声も聞こえる。これでやっと準備が整い、昭和世代の編集子も会議に参加できたのであった（もっとも、Wi-fi環境が悪いらしく、ときおり声が途切れますが）。

このようなことを書くと、編集委員会はまともに仕事できていないのではないかと思う向きも多いと思われませんが、そのようなことはありません。毎回毎回、さまざまな新しいことが決定されています（そのための大量の資料です）。編集子の一押しは、表紙のリニューアル。前号（第123巻第1号）から、和テイストのお洒落な表紙に変わっていることにお気づきでしょうか？

山田和男